



どんな仕事があっても、音楽と女には負けてしまう。

…… サミュエル・ピープス

サミュエル・ピープスの日記については、多くを割いて触れるべきなのかもしれませんが、ここでは、あまりにもあけすけに自らの日常をさらけ出して書いているので、興味のある人はお読みくださいという紹介に留めておきます。ただ、全10巻もあるので、あまりお勧めはしません。ちなみに、クロムウェル失脚後の王政復古の時代の人で、イギリス海軍の父と呼ばれる人物です。世界史を習った人は、ここでクロムウェルと聞いて、懐かしさを覚えられたかもしれません。



さて、巻頭の名言についてですが、女性云々の下りは、若かった頃には影響を受けたかなという程度で、ここではスルーします。音楽については、確かにそうかもしれません。最近思うことを2つ挙げてみようと思います。

個人的なことですが、毎年、紅白歌合戦を観るのを楽しみにしています。年末恒例だからということではないし、ましてや年齢を重ねて懐古趣味が強まったというわけでもありません。どの歌手も本気で歌っている姿、とりわけバシバシに緊張しながら最高のパフォーマンスを見せようと全力を尽くしている姿が、他番組の追従を許さない雰囲気になり、必見だと思っ

ているからです。

2年ほど前でしたか、玉置浩二がオーケストラと一緒に「田園」を歌ったことがありました。そのときは、久しぶりに強烈に感動したものです。儲かった感も半端なく、ライブ特有の緊張感がぐいぐい胸に迫ってきたものです。ただ、最近分かったことですが、それは録画だったようで、騙されたというよりも自分たちの感覚とはそんなものなのだという事を思い知らされました。



ところで、その紅白を見ていて、あれっ？と感じたことがあります。最近の歌にイントロがない、または、短い作品が多いということに思い当たりました。私の知っているヒット曲でざっと思い付くまま挙げてみても、Ado「うっせえわ」「新時代」、優里「ベテルギウス」、YOASOBI「夜に駆ける」「群青」、LiSA「紅蓮華」、米津玄師「Lemon」、King Gnu「白日」、櫻坂46「五月雨よ」…、と続きます。

それに対して、例えば、山下達郎「クリスマス・イブ」、小田和正「ラブ・ストーリーは突然に」、Eaglesの「Hotel California」、Procol Harum「青い影」など1分近いイントロが続く名曲や、Rolling Stones「Satisfaction」、Jimi Hendrix「Purple Haze」、Aerosmith「Walk This Way」などの特徴的なリフが続く楽曲は、ある意味で歌よりも有名かもしれません。



昔「クイズ・ドレミファドン！」という番組でイントロ当てクイズが流行したことがありますが、今ではそれが成立しない時代になったということになります。

理由はサブスク全盛の時代になったからと言われていますが、そう断定することでもないと思います。分かりやすい事例で言うなら、例えば、ビートルズはイントロなし曲の宝庫

です。「Hey Jude」「Nowhere Man」「No Reply」「Can't Buy Me Love」「If I fell」「Help」「Mr. Moonlight」…、それ以前の時代にも、イントロなし曲はたくさんあります。つまり、それを好む時代の波が来ているということだと思ふのです。

アイドルをずっと育て続けている秋元康氏の印象的な言葉が思い浮かびます。

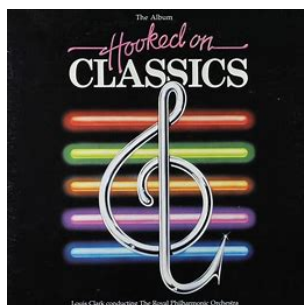
僕の好きな言葉に「止まっている時計は、日に2度合う」があります。例えば、ずっと前から延々とカスミ草だけを植えている人がいます。自分の姿勢を決して曲げない。でも、何年かに1度、カスミ草の大ブームが来て、この人は高い評価を受ける。



一方、ただ流されて、ヒマワリだ、タンポポだと移ろう人もいます。こういう人は、永遠に時代から5分遅れで走り続けるわけです。1度も時間は合わない。僕が今、就職先を選ぶとすれば、あえて最悪のところを狙うでしょうね。皆と逆へ逆へ行く。それが僕のやり方なんです。

冒頭の言葉とは直接の関係はありませんが、いつもの連想遊びですからご容赦ください。

もう1つは、組体操の思い出です。今から40年前までの組体操は、和太鼓や笛の合図で技を1段階ずつ仕上げていく手法でした。その方が1つ1つの技を丁寧に見せられたし、全体の進み具合を見ながら合図を送る関係で、もたつく子を待ったり、途中で失敗した子にやり直しのチャンスを与えたりすることが可能だったからです。複雑な動きを要求するわけではないので、練習も圧倒的に楽でしたし、技そのものを主役にしていて印象で、今より子供たちの成長ぶりをアピールできていたように思います。



しかし、いつの頃からでしょう。運動会に「Hooked On Classics」という楽曲がヒットした時代からのような気がします。音楽に乗って流れるように技が展開していく手法に変わっていききました。これによって、次々と変化する曲調によって表現力が格段に向上することから、それに合った技の構成を演出していくスタイルへと一気に変わっていったのです。これはどういうことかということ、和太鼓の合図方式と違って、1つ1つの技が完成していなくても次の演技に移ってしまうので、全体のまとまりや躍動感の印象を重視するようになったということです。そうすると、それまでの和太鼓での進行法が一気に野暮ったく、しかも物足りない印象になり、少なくとも小学校ではどこも採用しなくなっていました。

こうした傾向はさらに進み、今ではインストルメンタルよりもボーカル曲をそのまま使うことで、まるでMVか、ミュージカル・シーンのような群舞表現も組み入れるようになりました。と同時に、音楽の持つ影響力です。技そのものよりも音楽の力で感動シーンが生まれるようになったのです。

これは卒業式や学芸会にも言えることですが、子供たちの台詞に感動するのではなく、歌う楽曲に感動する傾向が強くなっているということです。どんなに優れた台詞劇を創作しても、子供たちの歌声の方が強く観客に届くし、印象にも残ります。効果音もまた然りです。この時、私は音楽には勝てないなと思うのです。

と言いつつ、そうこうしているうちに、名古屋大学の内田教授による組体操批判が起こり、コロナ禍とも相まって、運動会は今や完全に「ダンス発表会」へと変貌を遂げてしまいました。

さらに、卒業式では呼び掛けも歌も影を潜め、学芸会は学習発表会という名の、面白味に欠ける行事に置き換わってしまいました。寂しい限りです。

(終)



かつての学芸会より